

## 開発途上国の人々が 直面する貧困の現実

1・25ドル。

これが一体、何を示す数字か想像がつくだろうか。1日1・25ドル未満の生活。世界の貧困問題を語る時によく使われる指標だ。

それでは、あなたの1日を振り返ってみよう。朝起きて朝食を食べ、通勤・通学をし、夜寝るまで、1日に1・25ドル、つまり約145円しか使うことができないとしたら―。もちろん、家賃や光熱費もここから払わなければならない。とても今の生活を送ることはできないだろう。しかし世界を見回すと、そんな日本の私たちの生活は「スタンダード」ではないのだ。

開発途上といわれる国や地域では、いまだ多くの人が貧困に直面している。それを明確に表しているのが、1日1・25ドル未満の生活を送る人々の数。なんと、今もなお10億人を超えている。

日本もかつて、貧困に苦しんだ時代があった。第二次世界大戦後、日本は一面の焼け野原に。一から、いやゼロの状態から、国づくり、

復興に取り組みなければならなかった。自治体による公共サービスどころか、多くの人々は食べる物すらも満足に得ることができない日々。経済も停滞状態の中で、人々は田畑を耕し、自らの食べ物を作るだけで精一杯だった。

しかしその後、政府の戦略的な産業政策と国民一人一人の努力により、日本は見事に生まれ変わった。長きにわたり磨き上げてきた技術力を生かして高度経済成長を成し遂げ、全ての人に恩恵が届くよう国民皆保険などの制度の充実にも努めた。完全に貧困がなくなったとはいえないが、私たちは確実に、貧しさからの脱却の道を切り開いてきた。

しかし途上国では、まだまだ貧困問題が深刻だ。それは数字だけで表現できるものではない。社会の課題のあらゆる側面に表れる。貧しさは根深く、そう簡単に解決できるものではないからだ。またそれぞれの国が発展するにつれて、都市と地方の格差などまた新たな問題が生じてくる。全ての人が平等に豊かさを実感する社会の実現は、そう容易ではない。

特集

# 貧しさからの

# 脱却

開発途上国が直面するさまざまな課題。

それらは全て、人々の“貧しさ”を引き起こす要因となっている。

一人一人が豊かで幸せな生活を送れるよう、

国際社会が一丸となって貧困問題に立ち向かっている。



世界で  
1日1.25ドル未満  
で生活する人  
約**10**億人



### 全ての人が幸せを 感じられる社会を

2000年代に入ってから、この先が見えない問題に光が差してきた。国際社会が一体となって「貧困削減」「格差是正」に取り組もうという機運が高まってきたのだ。そのきっかけとなったのが「ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals: MDGs)」。2000年、ニューヨークで開催された国連ミレニアム・サミットで国際社会が1つのテーマを囲み、「貧困削減」「格差是正」などをキーワードに8つの目標を定めた。

だ。その一つである「ゴール1」は「極度の貧困と飢餓の撲滅」。2015年までに貧困と飢餓に苦しむ人口を半減させるという数値目標を明確に掲げている。

日本もこの動きに積極的に参加している。政府開発援助 (ODA) を通じた国際協力を始めて60年。その間、一貫して目指してきたのは、途上国の人々が一刻も早く貧しさから脱却し、格差なく平等に豊かな生活が送れる国づくり。教育、保健医療、運輸交通、環境などの分野で、インフラ整備から人材育成まで、さまざまな取り組みを進めてきた。全ての分野における取り組みが、草の根の人々の貧しさの解決につながるからだ。

しかし、MDGsの達成に向けた取り組みを経ても、サハラ以南アフリカや南アジアでは、東南アジアなど他の地域に比べ、貧困削減

が進んでいない。そこでJICAは貧困削減に対する効果的なアプローチとして、現地の人々に必要な能力の向上に向けて取り組みを進めている。①経済的能力(生活手段の確保および収入向上)、②人的能力(基礎的生活能力の向上)、③保護能力(脆弱性の克服)、④政治的能力・社会文化的能力(政治・社会参加の実現)の4つの能力だ。一人一人が豊かさを感じながら、未来の国づくりに関わることができるようになる。国際社会が一丸となった挑戦が、これからも続いていく。

特集  
貧しさからの脱却